

[8]

氏名	塩見 翔 <small>しおみ しょう</small>
博士の専攻分野の名称	博士（社会学）
学位記番号	社博第45号
学位授与の日付	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	現代日本の「鉄道愛好」に関する社会学的研究 ——「文明」の追求から「文化」の探求への変容——
論文審査委員	主査教授 永井 良和 副査教授 山本 雄二 副査教授 辻 泉（中央大学）

## 論文内容の要旨

本論文では、日本における「鉄道愛好」という文化現象が、いかにして現在見られるような幅ひろい担い手をもつにいたったのか、その経緯を記述・分析し、考察を加えるものである。鉄道に強い関心をもつ人びとの意識や行動についての分析は、従来の大衆文化論あるいは文化研究の領域でも散見された。しかしながら、その多くは男性の鉄道愛好者を研究・調査の対象としたものであり、その愛好のていどが相対的に強い、いわゆる「マニア」「おたく」などと称される人びとに焦点を合わせた議論が主であった。このような先行研究の傾向に対し、本論文では20世紀末から21世紀にかけて拡大した、いわゆる「ライトな」愛好者たちの実情にも分析の範囲をひろげ、多様な調査方法を併用するかたちで把握につとめた。先行研究とくらべたとき、この点は特筆されるものといえる。

また著者は、そのような対象者のひろがり注目して研究を継続し、鉄道愛好文化における関心のありようが大きく変化したことを描きだした。その変化とは、東海道新幹線が開業した1964年ごろを境として、鉄道愛好文化に見出されるものである。サブタイトルに示されたとおり、それは「文明」の追求から「文化」の探求へ、という方向性あるいは重心の移動、ととらえられている。

前者、すなわち「文明」としての鉄道の追求とは、おもに鉄道の技術的側面への関心をあらわす。また後者、「文化」の探求の局面では、鉄道に向けられる関心のありようが、消費対象としての関心に移行していく点が注目される。この変化は、日本社会全体がモータリゼーションや消費社会化といった変化を経験するなかで並行して生じてきたものであるが、結果的に鉄道愛好の担い手の拡大を促進した。本論文ではこのような変化の方向性を詳細に示しつつ、鉄道愛好者の行動や意識を具体的に記述するための調査、たとえば愛好者を対象としたインタビュー、鉄道雑誌の読者欄の内容分析などの作業結果を提示し、それらのデータを用いて鉄道愛好者たちの「経験」を描写している。

では、以下に論文の記述順にしたがって、章ごとの内容を要約する。

## 第1章 鉄道愛好という文化

第1章では、まず、論文の目的・対象・方法が示される。先述のとおり、論文の目的は日本における「鉄道愛好」という文化現象が、現在のように担い手を拡大させるにいたった経緯を記述・考察することにある。研究・調査の対象となるのは「鉄道愛好者」であり、方法は、これら愛好者を対象としたインタビュー調査、鉄道雑誌の読者欄の内容分析など複数の手法を組み合わせる複眼的なものであり、質的な調査を主にしつつも、その妥当性を高める工夫がなされている。なお、結論を先取りするかたちで、鉄道創業期にあたる明治時代に起源をもつ鉄道愛好活動が、1960年代以降、すそ野をひろげ「消費文化」としての色彩を強めていったという見取り図が示される。さらに、これが「実用的鉄道観」から「文化的鉄道観」への重心の移動としてとらえられ、日本社会の変容と関連づけて論じる可能性が示唆される。

ここに塩見氏の論文執筆の意図を見ることができる。すなわち、近代化・産業化志向からの離脱という方向性が、鉄道愛好文化の変化のなかから析出されるだけでなく、その方向性が日本社会の変容とも連動したものであることを示したいという意欲にほかならない。

## 第2章 先行研究と本論文の視点

先行研究として、ヨーロッパにおける代表的な鉄道文化研究および日本における研究がそれぞれ検討される。さらに日本の先行研究は史学的アプローチと文化研究的アプローチに大別され整理されている。日本の歴史学・地理学の領域においては、1980年代以降、鉄道を「文明の利器」として扱うのではじゅうぶんでなく、鉄道の文化的な意味に着目すべきだという議論がすでに芽生えていた点が確認される。これら先行研究の検討結果もふまえ、塩見氏は、「文化」を〈人々の意識や行動の体系であり、その結果として現れた状態をも含めたもの〉と定義し、「鉄道文化」は〈鉄道の存在を前提として立ち現れる文化〉をさす語として用いるとしている。

いっぽう、鉄道愛好の「ソフト」な面、いわゆる文化領域にかかわる探求は、文化研究者たちによって担われてきた。これらの研究が扱ったのは、日本における「鉄道信仰」の成立過程や、鉄道が「想像力のメディア」として機能してきた側面である。さらに、ジェンダー論やオタク文化論、少年文化論の分野でも鉄道愛好者研究は蓄積されてきた。ただし、それらの成果には、鉄道愛好が男性に偏るものとみなされたり、「おたく」との関連で論じられたりという特色、いいかえれば限界があった。鉄道愛好文化がより多様な人びとによって担われている点は、従前の研究において等閑視されてきた。

本論文の審査にあたった辻泉の論文（辻 2008）は、この分野の先行研究としてきわめて重要なものだが、対象者の属性は男性に限定されている。また辻が調査対象とした愛好者は鉄道に深くコミットした人びとであり、いわゆる「ライト」な鉄道愛好者の意識や行動についてはふれられていない。先行研究の傾向や、今後の研究の方向性を見すえたとき、塩見氏にとっての課題は明瞭になる。それはすなわち、女性の鉄道愛好者や、「ライト」な鉄道愛好者の意識や行動を調査することではじめて明らかにできる点を、論文作成を通じて探求することであった。

第3章 「文明」の追求としての鉄道文化・鉄道愛好（鉄道創業期～1964年）

第4章 「文化」としての鉄道の発見（1964年～現在）

つづく2つの章で塩見氏は、日本の鉄道史をたどりなおしながら、並走する鉄道愛好のかたちがどのように変容したのかを論じている。

第3章では、日本の鉄道創業期からおよそ1964年までを、さまざまな資料群を渉猟したうえで記述している。上述のとおり、この時期においては、鉄道の技術的側面が重視されていた。それは多様でありうる鉄道文化のうち、近代化過程にある日本社会・国家の要請に貢献する技術の面に集中的に向けられた関心であった。このような鉄道観を背景とした鉄道愛好を、塩見氏は「文明」としての鉄道の追求と位置づけられる。實用主義志向の象徴的な到達点は1964年の新幹線開業であり、その後、鉄道事業は経営的な問題を増大させた。また日本の社会・文化が変容するなかで、社会基盤としての機能以外のありようが模索された。必然的に、鉄道愛好文化も、この時期に変化せざるをえなくなる。

1960年代後半からは、発達するマスメディアの影響のもと鉄道にかかわるさまざまな流行現象が生じた。それは、蒸気機関車にのみ関心を示すとか、写真を撮ること・走行音を録音することに熱中するといった、情動的で一時的な愛好行動として具体化する。塩見氏は、このような愛好行動のありかたを、鉄道に関する知識の体系的・継続的な獲得をめざす「伝統的」な鉄道趣味のふるまいとは対照的なものと位置づけている。

1970年代後半からの「ブルートレイン・ブーム」は、さらに愛好のありようをひろげていく。また1978年に刊行された宮脇俊三『時刻表2万キロ』という紀行作品は、旅行という行動を鉄道愛好に結びつける契機となり、女性が参入しやすい領域を拡大した。国鉄の「ディスカバージャパン」キャンペーンや女性向けの雑誌を通じた旅行消費の喚起などの要因が作用して女性が旅行趣味に向かったとする常套的な説明にくわえ、塩見氏は独自の見解を示している。すなわち、前提となる鉄道に対する社会的なイメージが「文明」から「文化」へと変容をとげていたからこそ、鉄道愛好と旅行愛好との「習合」が成立したのだ、と。

第5章 鉄道愛好者のライフヒストリー——森口誠之氏を中心としたインタビューデータから

第6章 『鉄道ジャーナル』読者欄の盛衰と読者たちの「公共圏」の変容

第7章 女性鉄道愛好者のライフヒストリー

つづく3つの章では、これまでの章で編年史的に記述された鉄道愛好のひろがりに関連する、調査のデータが示される。とくに、「文化」として鉄道が消費されるようになった時期について事情をよく知る鉄道愛好者を対象としたインタビュー、鉄道雑誌の読者投稿欄の記事内容の分析、さらに女性愛好者のライフヒストリーの記述と分析などの作業が詳細に報告される。

第5章では「鉄道再発見世代」を体現する人物として現在は鉄道ライターとして活躍する森口誠之氏ら5名のインタビュー調査結果が示される。その作業をとおして、鉄道愛好者の愛好者としての自認（「ファン」なのか「マニア」なのか、それとも「おたく」なのか）がどのように形成されるのか、あるいは区別される他の愛好者の存在をどのように意識しているのかが描かれる。また、たとえばゲームやアニメを愛好する人びとが用いる「世界

観」という語によって鉄道愛好の独自性がどのように説明できるのかといった問題、愛好者が細分化される状況にあってカテゴリーを表す言葉が日常会話でどのように運用されているのか、といった事項が明らかにされる。

第6章では1980年代から2000年代にかけての『鉄道ジャーナル』読者欄への投稿内容を分析している。1980年代に国鉄の再建策をめぐる意見交換が活性化し、「役に立つ」鉄道と、付加価値としての「ゆとり」を求めるべき鉄道という、異なった見解の対立や消長がみられた。塩見氏は、この過程を逐一の投稿の文言を吟味しつつ跡づける。しかし、鉄道が現代の消費文化の対象へと変貌していくとともに、そのような議論の場そのものが成立基盤を失っていく。これを塩見氏は、「鉄道を社会的に論じる」ことの困難、としてとらえている。

第7章では現代的な鉄道愛好文化を象徴する女性鉄道愛好者を対象に実施したライフヒストリーにかかわる聞き取りの結果を、比較対照となる男性愛好者への取材で明らかになった点をふくめて紹介している。大学の鉄道サークルに参加する愛好者のばあい、女性と男性とでは、その道筋が異なった。男性のばあいは幼いころからの関心に根差すのに対し、女性のばあいは、サークル入会後になってようやく鉄道に関心をもつことさえあるという。現在の鉄道サークルでは、従来とはちがい、鉄道に対する強い関心や知識が前提となっていないことも明らかになった。

ライトな愛好者をも視野に取りこむべく、塩見氏は、鉄道サークルでの活動経験をもたない女性鉄道愛好者へのインタビューも実施している。なるほど、これらの女性の行動や意識のなかに「マニアック」な鉄道愛好への志向を見出すことはむずかしい。しかし、彼女たちが一様に「ライト」であるかということ、そのように決めつけることもできない。塩見氏が調査から得た知見は、鉄道愛好の世界に「階層構造」があることを認め、自らをそのなかの周辺的なものとして位置づけている人もあれば、階層的な「鉄道趣味」のイメージに取りこまれることを回避し、「ライト」対「マニア」、「女性的」対「男性的」といった葛藤から自由であろうとする人もある、という多様性であった。

## 第8章 結論——現代日本の鉄道愛好

第8章は論文の結論部分にあたる。くりかえしているとおおり、日本の鉄道愛好文化は、「文明」の追求から「文化」の探求へ、と変化した。これを言い換えると、(狭義の)「メインカルチャー」から(狭義の)「サブカルチャー」へ、そして「フラット・カルチャー」的な文化状況の中へ、と鉄道愛好文化の重心が移動したととらえられる。

本論文の意義として塩見氏は、以下のような点をあげる。

まず、愛好者(ファン)研究としてみたとき、本論文で対象とされた鉄道愛好者は、その歴史の長さゆえ、結果的に異なった文化状況に関わっていた点で特徴的である。とくに1980年代以降現在にいたるまでの文化状況において、各時期の愛好者がいかに鉄道を経験し、価値観を形成してきたのかが対比的に提示されている。従来の「サブカルチャー」研究や「ポピュラーカルチャー」研究では、特定の領域に閉じた「深い」「熱い」愛好者が描かれる傾向が強かったが、本論文では「フラット・カルチャー」的な状況における「ライト」な愛好者に注目し、現代社会を特徴づける愛好のありようが探求されている。

最後に、このような「ライト」な層を研究対象にふくめることの意義についてふれられ

ている。「コア」なファン、「おたく」などをとりまく、さらにひろい愛好者層への注目という着眼・手法は、鉄道以外の対象に没入する人びとの意識や態度の研究をする際にも応用可能であり、今後の文化研究においても有効な方向性のひとつであるという見解が示されている。

## 論文審査結果の要旨

本研究科が定める「博士論文審査基準」には以下の5項目が掲げられている。

- (1) 研究テーマが明確であり、社会的意義が認められるか
- (2) テーマに基づいて、適切な問題を設定し、一貫した論理展開がされているか
- (3) 研究目的にふさわしい分析手法が用いられ、資料やデータの解釈は適切かつ厳密か
- (4) 先行研究や関連した研究を十分に調査し、的確に考察されているか
- (5) 研究テーマの分析内容、結論において、独自の知見など独創的な観点がある

上記1で述べてきた内容からなる本論文を、この審査基準に照らして評価したところ、私たちは次のような審査結果を得た。

- (1) 研究テーマが明確であり、社会的意義が認められるか

塩見氏が選択した対象とした人びとは、その行動の珍しさから世間の耳目を集めながらも、学術的な研究でとりあげられることが多いとはいえない存在であった。好奇の目で見られ、偏った評価を受けやすい愛好者の世界に深く切りこんだ点は、独自性の高い取り組みだといえる。また、先行研究を参照したうえで、主要な対象を「ライトな」愛好者・愛好行動、「女性ファン」などに設定した姿勢も明確であり、これまでの研究でカバーされていなかったフィールドを開拓したという意味で、他にはない特色といえる。

得られた知見に限りはあるものの、娯楽や趣味にかかわる諸現象を理解する際の構えとして、「コアな」あるいは「ディープな」と形容される人びとのみならず、一時的、表面的に関与する人びとの存在を看過できないという主張は、他の研究領域に属する者にとっても意義のあるものと認められる。

- (2) テーマに基づいて、適切な問題を設定し、一貫した論理展開がされているか

塩見氏の主張は、鉄道愛好者によって向けられる関心が「文明」から「文化」へとシフトしたという主張で一貫しており、揺らぎはない。問題設定については、愛好者の意識や行動、総じて愛好者の文化と呼びうる現象の背景にある、よりひろい社会への目配りを考慮したものになっている。結果として、設定した問題に対する検討がじゅうぶんとはいえないところもあるものの、執筆目的を達成するべく、さまざまな方法を駆使し、課題に対して誠実に向き合っている点は確かであると認められる。

- (3) 研究目的にふさわしい分析手法が用いられ、資料やデータの解釈は適切かつ厳密か

検討の対象となる時代は、明治初期から現代までおよそ 150 年の期間になる。そのため、古い時代については文献資料・二次データの活用、現代に近い過去については回顧的なインタビューや新聞・雑誌記事、同人誌などの分析、さらに現代については愛好者への直接の聞き取りや鉄道サークルへの調査票を用いた実態把握などの作業が実施された。

一連の作業のなかでは、同一対象者への複数回の面談など、ラポールの形成・維持が前提となる調査も継続されている。また、調査対象者のプライバシー保護やデータの管理などについて倫理的な問題が生じないような配慮も適切になされていると判断できる。

歴史的資料の扱い方に関しては、専門外であることや経験不足から若干の不備がみられるものの、総じて、以上のような、いわゆる「トライアンギュレーション」によって質的な調査の妥当性を高めるために多様な手法を組み合わせが心がけられており、目的にかなう手法が用いられていると認められる。

#### (4) 先行研究や関連した研究を十分に調査し、的確に考察されているか

本論文と同一のテーマ、同一の対象を研究した先行事例は、日本においてはほぼないと言ってよい。したがって、参照されるべきものは欧米における鉄道愛好者に関する研究、国内に関しては、隣接諸領域での研究、とくに鉄道史、鉄道経営史、地理学などにおける蓄積と、テーマを共有しうる対象を扱った大衆文化研究、サブカルチャー研究、ファン研究、オタク研究、ジェンダー研究、メディア研究などの成果といえる。塩見氏は、これらの研究について精査しており、その内容についてもじゅうぶんに理解していることが論文からうかがえる。学術的な研究以外の言説についても、公刊されたもの、公刊されていないものの別なく、ひろく収集し、参照できるものは活用されている。

#### (5) 研究テーマの分析内容、結論において、独自の知見など独創的な観点がある

日本社会における趣味として歴史も長く、また日本社会のありようを象徴するような文化現象でありながら、先行研究が乏しい対象に取り組んだ点には高い独自性が認められる。また、複数の調査法・方法論を組み合わせ、把握しづらい実態を多角的に解明しようとした姿勢、努力について評価することができる。

趣味・愛好の文化を、対象に深く没入する相対的に熱心な人びとだけでなく、消費活動を主にした、いささか浅く、軽い愛好のありようにまで拡大して把握しようとした試みは、先行研究の及んでいなかった欠点を補完するものである。これを他の研究対象に応用することを考慮すれば、意義のある姿勢を提示したといえる。

これら、対象のユニークさと、他の対象への援用の可能性を開いたことが、この研究の独創的な点と認められる。

「審査基準」に沿った以上の評価以外の点を付言する。

本論文における文章表現は、いたずらに術学的なものに陥ることなく、用語等の説明でも平易であることが心がけられている。さらに、部外者にとってなじみにくく、理解が容易ではない愛好者たちの独特な言葉づかいや価値観も、読み手にわかるよう表現が工夫されている。そのような意味で、将来的にはより充実したモノグラフの完成につながる基礎的な作業として評価できる。

ここまで詳述したとおり、学術的にみて本論文は一定の水準に到達しており、塩見氏が研究者として求められる条件を備えていると認めることができる。しかし、いっぽうで、本論文のなかには、当然、物足りなく感じる箇所があり、研究者としていっそうの経験を積むことや、調査を継続してはじめて明らかになるであろうことも残されている。この項を終えるにあたり、審査員の意見を取りまとめて記載しておく。

まず、ユニークな調査対象を得ながら、その分析から得られた知見が、既存の学問にどの程度のインパクトを与えるのかという観点からの意見である。既述のとおり、分析対象を拡大したことで、これまでの研究では言及できなかった点を析出することができた。たとえば、本論文の知見として特筆できるもののひとつとして、女性鉄道愛好者が自らの趣味を自認するのは、男性にくらべると遅い、という事実がある。しかしながら、この知見を、たとえば、一般的なジェンダー差とどのように関連づけて理解するべきか、それについて明らかになっているとはいえない。この例にとどまらず、本論文で解明された諸事実が、一般社会のどのような動向とむすびついているのか、あるていどの言及はなされているものの、つきつめて論じられたとはいえない面が残されている。結果的に、既存の学問——社会学であれ、大衆文化論、あるいはジェンダー論であれ——に対して、いかなる貢献をしたのかが明瞭になっていない。先行研究の欠陥を指摘したうえで、それを超えるために実行された作業の意義は大いに評価できるが、乗り越えた先に提案できる新しい図式や概念がじゅうぶんに示されなかったのは残念である。

また、歴史的資料の再構成についても、当事者の同時代での発言と、調査者や取材者による回顧的な概念とが厳格に区別されていない点が残されている。時代区分において何を指標にしているかが曖昧にされたため、他の区分のしかたとくらべて、より説得力があるのかないのか、その判断がむずかしいということも指摘された。ただし、これらの不備を補うためには、よりひろい範囲での資料の収集やインタビューなどの作業の継続も不可欠であるため、本論文の評価においては、これらを大きな瑕疵とは考えない。

塩見氏の主張を圧縮して表現すれば、鉄道愛好「文化」が、「文明」から「文化」へと重心を移行させたということに尽きるわけだが、その際の「文化」および「文明」という用語の重複は、今後、再検討する必要があるだろう。明治期以降、日本社会の近代化をささえた「文明」すなわち〈技術やモノにかかわる文化〉も、上位概念である「文化」の一部とみなされるからである。

経済的発展を是とする価値観からの離脱を、「文明」から自由になることとみなす点では塩見氏の見解に異論はない。しかし、自由になった先にある「文化」、そこに塩見氏は「ライトな」愛好者や女性愛好者を位置づけているのだが、いっぽうで、古くからの愛好のありようが残存し、重層している点に、他の趣味とは区別される鉄道愛好の特徴を読みとっている。けれども、鉄道を技術的な面でとらえ、社会の発展に貢献するものとして従属させるような従前の観点から自由な、現代的な愛好のありかたこそが、ファンとしての純化がすすんだ形態だと見なしうるのではないか。趣味なのか文化なのか、未分化な状態に身をおき、軽々とファンになり、いつやめてもよいような楽しみかたをしている人びとに、楽しめばよいのだということを示唆することができれば、そこに趣味がイデオロギーから自由になる可能性が開かれるのではないか、との見解も成立するだろう。

お仕着せのイベントやグッズにのみ小さく関心をまとめ、消費者としてしかふるまわな

いようなライトファン、というイメージにとどまっていたは、鉄道趣味の未来を見出しにくい。本論文でも言及される保存鉄道運動のようなかたちのなかに、「文明」の根源を歴史として継承する貴重な兆しを見出し、「文化」の側にある高い意識を読み取ることも可能ではないか。

口頭試問の際に、以上のような指摘や意見交換がなされたことを記録しておく。

とはいえ、これらの審査員の意見も、本論文に刺激され誘発されたものといえる。本論文執筆にいたるまでの限られた作業・考察で不足した諸点については、いずれも、将来的に取り組むべき課題、より発展的な研究に道をつける際の留意点として提示するにとどめる。

審査委員はいずれも、ここに記した意見を参考に、塩見氏が今後の研究活動のなかで寄せられた期待に応えることを望むものである。本論文において示された塩見氏の資質・学識・能力は、現時点で専門分野の研究者として自立的な研究を遂行できるものと認められ、課程博士の合格基準に到達していると判断する。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。